

継ぐ接ぐ次ぐ―初版に添えて―

啄木の歌碑は全国に170基以上もあると小山田泰裕氏が伝えている。(『啄木うたの風景』岩手日報社) 啄木の歌碑は大正から昭和、平成に至るまでつと建てられ続けている。現代まで多くの人々の心を捉え続け、歌碑まで作らせている理由はどこにあるのだろうか。私はここに文語、口語を超えて人の心をつなぐ短歌という詩型の持つ力を感じるのである。

今、二十代、三十代の若者の間で、短歌や俳句を作って楽しむ層が急速に広がってきている。現代短歌では一首の中に文語、口語が入り交じるのは当たり前、口語短歌の中に文語を遣い込む時代である。さらには文語のかけらさえない短歌も多くなっている。しかし、そこでは文語定型詩の持つ枠が散らばりそうな口語をしつかり取り込み、その世界を練り上げてくれる。

日本語の美しさという用語弊があるが格調高雅な語調は文語の響きが持っている。それを活かすのは短歌の詩型である。定型は私たちに知識、思想、感性を総動員して、その言葉の響きに磨きをかけることを要求する。啄木の歌が今日まで、多くの人々の心を打ち続けている理由は、その歌が定型によって磨かれた響きを持っているからと言っていいのではないだろうか。

こうして私たちは日本語の担い手となっていく。
さあ、「次は君だよ」

二〇二〇年二月二日